NPO法人そーさぽ旭川 × おおいた子ども支援ネット

大分・旭川 子ども・若者 支援交流会 リターンズ

ＮＰＯ法人おおいた
子ども支援ネット理事長
矢野　茂生さん

A′ ワーク創造館
副館長
西岡　正次さん

日時：2023 年 **11** 月 **13** 日（月）午後 6 時 30 分から（120 分）

会場：旭川市ときわ市民ホール 1 階研修室 101（5 条通 4 丁目）

対象：子ども・若者支援関係者 30 名程度

申込み：2023 年 11 月 10 日（金）までに
Google フォームでお申込みください。

Zoom 参加も可能です
機材の都合で
聞くだけ参加となります
のでご了承ください。

［主催・お問い合わせ］ＮＰＯ法人そーさぽ旭川 mail：ssn.asahikawa@gmail.com
［協力］一般社団法人みらくる

ＮＰＯ法人おおいた子ども支援ネット 理事長 矢野 茂生さん

大学卒業後、アルバイトを経て中学校教諭として 9 年勤務したのち、児童自立支援施設の専門員として 13 年勤務する。2014 年 11 月、ＮＰＯ法人おおいた子ども支援ネットを設立し、2015 年 4 月から事業開始する。同法人は大分県において、子どもの最善の利益、権利擁護を基盤にした包括的なこども支援事業を展開、「すべての子どもたちに明るい未来を！」を事業運営理念に掲げ、幼児期、学童・青年期、成人期までライフコースに寄り添った支援を実践しながら、自治体や省庁と連携したモデル事業にも取り組んでいる。

A′ ワーク創造館（大阪地域職業訓練センター）副館長 西岡 正次さん

大阪府をはじめ全国の自治体や支援団体等と連携して、自立就労支援施策や人材開発施策、地方創生等の推進を応援。一般社団法人生活困窮者自立支援全国ネットワーク理事。令和 3 年度厚生労働省「生活困窮者自立支援のあり方等に関する論点整理のための検討会」構成員。「若者施策としての就労支援」宮本みち子ほか編著「アンダークラス化する若者たち」（明石書店）、「生活困窮者支援で社会を変える」（法律文化社）、「相談支援を利用して『働く』『働き続ける』」宮本太郎編著「転げ落ちない社会」（勁草書房）所収。

大分・旭川子ども若者支援交流会の経緯

2022 年 4 月 26 日：西岡さんと矢野さん来旭。「大分・旭川子ども若者支援交流会」を開催。矢野さんの 1 時間弱のお話があまりにも濃すぎて、参加者から「もっとお話を聞きたい」とリクエストが多数出る。矢野さんに追加の事業をお願いし、快諾をいただく。
2023 年 5 月 17 日　：「大分・旭川子ども若者支援交流会ふかぼり篇」を 2 週に 1 回の頻度で全 6 回開催。参加者のみなさんに「ぜんぶ、つながっているんだ」という感覚を持ち帰っていただくことを目指して、障がいのある子どもたち、社会的養育により育った子どもたち、触法行為をした子どもたち、ひきこもった子どもたち、大人になった子どもたちへの支援について意見交換。7 月 26 日にフィナーレ。リアル・zoom を合わせて 44 名延べ 136 名が参加。

ふかぼり篇に参加していない方のために、「刺さったワード大賞」のおさらい

印象に残った矢野さんの言葉を「刺さったワード」として、ノミネートされた 45 個の中から大賞を決定。

第 1 位：「選択肢がなかった生い立ち」（第 4 回）14 票～非行少年たちは「そうなるしかなかった」という選択肢がなかった生い立ちの子どもが多い。矢野さんの自立援助ホームでは、選べることを大事にしている、というお話。

第 2 位：「ひきこもりは状態像」（第 5 回）12 票～ひきこもり地域支援センターを 6 年間運営する中で、ひきこもりとは、いろいろあって、結果としてひきこもるしかなかった人。関係性を剥奪された人と考えている。その結果として、精神的な疾患に陥る人が多い、というお話。

第 3 位①：「支援者のエゴで障がい者にさせようと躍起になることが本末転倒」（第 1 回）11 票～「障がいを受け入れない人」ではなく「障がいの診断や手帳がなければサービスにつながらない社会」の方に問題があるのではないか、診断や手帳がなくても、本人がやりたいこと、なりたい姿を応援することが大切、というお話。

第 3 位②：「家庭に戻った子どもたちがどうなったのか、誰も見えていない」（第 3 回）11 票～虐待などで児相相談所に一時保護された 100 人のうち、施設に行くのは 2～3%。小さい頃一時保護されていながら家庭に戻り、その後困難な状況となっている子どもに出会う、というお話。

第 3 位③：「困難は地続きである」（第 3 回）11 票～困難は続いていくが、制度に子どもの人生が区切られてしまう。大人向けの制度を使うよう言われるが、子ども期の困難が解決できないまま大人になった子どもに、18 歳以上向けの制度だけでは対応できない部分がある、というお話。

第 3 位④：「非行以外に、価値を味わってほしい」（第 4 回）11 票～様々な経験を経た非行少年に、非行以外の価値をどう味わってもらえるかが大事。社会で生活しながらたくさんの人と出会い直し、それを味わえる仕組みをどうつくっていくか、というお話。

【第 4 位以下】**「地続きの困難には中長期的・伴走型のかかわりが必要」**～ある日突然非行少年になるのではなく、様々な経験をして非行少年となっている。その場しのぎの支援では通用しない。ピンポイントの司法だけでは難しく、教育・福祉・地域に広がりを持って関わる必要がある、というお話。／**「赤信号ではなく黄信号のうちに地域単位でリソースを投入すること」**～緊急対応を必要なレッドゾーンには、専門職の対応、治療やジャッジが集中的に必要になるが、黄色ゾーンのうちに地域、家族、民生委員、企業など色々な人の力を借りてリソースを投入すれば、レッドゾーンに陥らずに済む。それができる単位は市町村である。地域の力で家族の堅い扉が開く瞬間がある、というお話。／**「勇気を出して相談した人の話を聞くスキル、アセスメントが大切」**～せっかく勇気を出して電話してくれた人の話を徹底的に聞く。ひきこもりという言葉に反応して丸投げしてはいけない、というお話。／**「障害者手帳を取り、サービスを使えるようになることが目的化してしまう」**～支援者は手帳を取ってサービスにつなげれば「なんとかなるんじゃねーか」と思いがち、というお話。／**「（CONET）世間話から始めて世間話で終わることが大事」**～ケアリーバーに相談を勧めてもスルッと出てこないので、長い時間をかけて、話してくれる関係づくりをすることを意識している、というお話。／**「まだ自分にもできることがある」**～医療や障がいといったサービスにつなげるでもない支援のあり方、好きなことを活かした役割で社会参加する工夫。ひきこもりながら、ゲーム配信で 240 人と交流していた人と一緒に動画編集の仕事を請け負った。仕事をやり遂げた本人が泣きながら言った言葉、というお話。／**「生まれる前にさかのぼる困難を抱える子どもたち」**～矢野さんが出会う子どもたちは、よく知ると生まれてからの困難どころか、親の人生にさかのぼった困難を抱えている、というお話。／**「障がいある子どもと親のくらしをととのえるサポートが必要」**～生活の中に治療があり、障がいある子どもと親をまるごとサポートすることが必要、というお話。／**「ボーダー・グレーゾーン禁句」**～環境と折り合わない子どもを「ボーダー」「グレーゾーン」と名付けてしまうが、ひとりひとり個別に異なる折り合わなさを持っているので、その言葉は使わないようにしている、というお話。／**「96%に妊娠期・幼少期から家庭リスクがあった」**～大学院で子どもたちが非行に走ったケースを研究したところ、妊娠期・幼少期から経済的因子、関係的因子に課題がある、家庭環境に不安定さがあった。行政や学校のサービスとのミスマッチもあった、というお話。／**「不登校とひきこもりの因果関係」**～相談者から詳しく聞き取った結果、79%が不登校経験者だった。因果関係があると考える。人と場所の関係性、ヒモが伸びていく本数を議論しなければならない、というお話。･･･and more！つづきは会場で！